

聖書：第二サムエル記 15章 24～29節

説教：荒野の試練

あらすじ

ダビデの三男アブシャロムは、四年の歳月をかけて父に知らせることなくひそかに軍隊を組織し、いっぼうではダビデの信用を失わせるような事を言い広め、イスラエルの人々の心を欺き続けました。人々の心がアブシャロムになびいてきたのを見て、自分は今こそイスラエルの王であると宣言します。この知らせを聞いたダビデは、決断を迫られました。このまま王座にしがみつki、エルサレムに留まるなら戦争は避けられません。そうなれば町の人々を巻き添えになり、犠牲者が出ます。ダビデはすぐにエルサレムから脱出することにします。しかし何の準備もありません。多くの家来たちがダビデを捨てアブシャロムの側に寝返っていきます。ダビデはそんな苦しみの中で、何を見ようとしていたのか。そのことを考えていきます。

1 祭司ツアドクとエブヤタル

24節を読みます。「ツアドクも、すべてのレビ人といっしょに、神の契約の箱をかついでいたが、神の箱をそこに降ろした。エブヤタルも来て、民が全部、町から出て行ってしまふまでいた。」

ここにツアドクとエブヤタルのふたりが登場します。今日の箇所を理解していくためには、このふたりがどのような人たちであったのかを知っておく必要があります。

まずツアドクです。時間は、ダビデがイスラエル王になろうとしていた頃にさかのぼります。イスラエルの初代の王であったサウ

ルは戦いのさなかに死んだことで、次の王をどうするか国内が騒然としています。当然サウル家から次の王が出るべきだと考える人たちが沢山います。そのような中ですから、ダビデのを支持するのは裏切り者扱いされかねません。それでもイスラエルの町や村からダビデの元に馳せ参じて来る者がいました。そのひとりがツアドクです。彼はダビデの人柄と信仰に惚れ込み、若い頃からずっとダビデを支えてきた側近のひとりです。

次にエブヤタルはどうか。話はこれよりももっとさかのり、ダビデがサウルのもとで働いていた頃のことです。サウルのいじめはエスカレートし、とうとう着の身着のままダビデが逃げ出さなければならなくなります。そうしてアヒメレクという祭司のところに転がり込みました。驚いたのはアヒメレクです。サウル王の側近であったダビデが、みすばらしい格好でやってきて、食べ物はないかと尋ねたからです。ダビデはアヒメレクに迷惑がかからないようにと詳しい事情は知らせず、アヒメレクから食べ物を受け取り、帰って行きました。そこまではよかった。

後になってこのことはサウルの知るところとなります。すぐにアヒメレクを逮捕し、裁判にかけ、ダビデをかくまった罪で一族もろともに虐殺してしまいます。その虐殺の現場から逃れてダビデのところに逃げてきたのがアヒメレクの子のエブヤタルです。エブヤタルは、ダビデに父アヒメレクの最期の様子を伝えます。「父は裁判にかけられたとき、真実を曲げずに神をあかしし続け、ダビデの

信仰を高く評価していた。サウルの怒りを受けて、父と一族は全員殺されました。」それを聞いてダビデがどれほど心を痛めたかと考えます。ダビデはエブヤタルをかくまい、親切を施し、後に祭司として神の契約の箱に仕える者に任命していきます。ダビデとエブヤタルの間にはこのような事情がありました。

2 ダビデ

1) 信仰を告白する

さてダビデは、ツアドクにこう言います。25節。「神の箱を町に戻しなさい。もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださるだろう。もし主が、『あなたはわたしの心になかない』と言われるなら、どうか、この私に主がよいと思われることをしてくださるように。」

モーセ以来、イスラエルにとって契約の箱は神の臨在を現す大切なものとして扱われてきました。ダビデもイスラエルの王となり、エルサレムに都を定めたとき、真っ先に神の箱をエルサレムに迎えました。そのために盛大なパレードを企画したほどです。それから月日がたち、アブシャロムに追われてエルサレムから逃げ出さなければならなくなりました。当然、契約の箱もダビデといっしょに行くものと誰もが思っていました。ところがダビデは言うのです。「神の箱をエルサレムに戻しなさい。」それは何を意味するか。ダビデの側には神の箱がないのですから、神の臨在がないということになります。いっぽう、アブシャロムがエルサレムに入れば、その日から神の臨在はアブシャロムの側にあることになります。そうなれば、人々の心はます

ますアブシャロムに傾くでしょう。どう見てもダビデには不利な話です。それなのにどうしてダビデは神の箱を戻そうとするのでしょうか。

ダビデは生きるか、それとも殺されるのか、その瀬戸際に立たされています。トランプのゲームに例えれば、そんなときは少しでも勝利につなが可能性があるものならなんでも手もとに残しておくべきだと考えます。ダビデは、最も強いカードである神の箱を手もとに置いています。ゲームに勝つためには絶対に手放すべきではありません。肉の目で見るとならそういう結論になります。

しかし霊の目で見るとならどうということになるでしょう。もし神の箱を離そうとしないというのなら、それは自分の手で救いを勝ち取ろうとしているのと同じではないですか。神の箱を自分の救いのために利用することになります。ダビデの目に神の箱は非常に魅力的に見えました。でも動機が問われたときに、間違いに気がつきました。神の箱を利用してはならない。それで都に戻す決断をします。自分が救われるかどうか、それは神の箱がどこにあるかではない。救いを与えてくださるのは主ご自身である。その告白にもう一度立ち戻っていきます。

2) ふたりをエルサレムに戻させる

続いてダビデは27節でこう言います。「先見者よ。あなたは安心して町に帰りなさい。」「そこで、ツアドクとエブヤタルは神の箱をエルサレムに持ち帰り、そこに留まった。」

ダビデは神の救いを信じて神の箱を戻した。美しい場面です。でもツアドクとエブヤタルの立場から見たら、ちょっと違います。アブシャロムがエルサレムに入ってきたと

き、ツアドクとエブヤタルがそこで無事でいられるかどうか、どこに保証がありますか。ダビデの味方は誰であれ殺す。それが戦いの鉄則です。ふたりが殺されるかもしれないのです。

「いやいやふたりは祭司なのだから殺すはずがない」、と思うでしょうか。でも、かつてサウルは何をしましたか。逃げたダビデをかくまったという言いがかりをつけて祭司であろうともアヒメレクの家を皆殺しにしたのです。エブヤタルはその時のことを思い出したはずです。自分ももしかして父と同じ運命をたどるかもしれない。

ダビデもあのときのことは忘れてはいません。アブシャロムが、エブヤタルを殺すかもしれません。ダビデの決断によって、もしかすると父が受けた苦しみを、その子どもにも味わわせてしまうかもしれない。ダビデの心は複雑です。けれども神の箱を戻すためには、彼らもいっしょに戻る必要があります。ダビデは、苦しみながらふたりに対しエルサレムに戻るようにと命令しました。

3) あなたがたから知らせを待つ

もちろんそこにはダビデなりの配慮もありました。もしふたりがエルサレムで無事に過ごすことができれば、ふたりを通じてアブシャロムに関する情報をつかむことができます。情報があれば、なにが有効な手立てを打てるかもしれません。けれども本当にうまくいくのかどうかはわかりません。すべては、神が救ってくださると信じるしかありません。

3 イエス・キリスト

1) 荒野で捨てられる

ダビデはアブシャロムに追われてエルサレムを脱出し、荒野に逃れようとしています。神の臨在を現す契約の箱はそばにはありません。エルサレムに戻ることができるかどうか、それはすべて主の恵みをいただかれるのかどうかにかかっています。イスラエルの王座にあったダビデが、いまや人々から追われ、裏切られ、神からも見捨てられていくような有様になり果てました。

ダビデの姿から主イエス・キリストの姿が浮かび上がります。主が十字架におかかりになる直前、この方はどこで逮捕されたでしょう。エルサレムの外でした。町の中にいたほうが安全であったのにあえて町の外に出て、捕まえられやすいようなところに身を置きました。

主がおかかりになった十字架はどこに立っていたのでしょうか。ゴルゴダの丘です。エルサレムの町の外です。この方は、ご自分の都であるエルサレムから追われ、町の外でご自分のいのちをお捨てになりました。

ダビデの告白の後半。「もし主が、『あなたにはわたしの心にはかなわない』と言われるなら、どうか、この私に主がよいと思われることをして下さるように」は、主が十字架でさばきを受けられたことによって成就しました。

十字架におつきなったとき、そこには父なる神の臨在はあったのでしょうか。主は叫びます。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」十字架の周りにいた人々は、思いました。「彼に神の救いはない。」肉の目で見るとおりのとおりです。この方はご自分の国に来られたのに、王の座から降りてへりくだり、すべての権威をお捨てになり、父なる神にも見捨てられます。

2) 主はわたしを連れ戻す(よみがえらせてくださる)

しかし一つだけこの方が捨てないものがありました。ダビデの告白の前半にあるとおりです。「もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださるだろう。」今は死ぬ者となるけれど、やがて神は私をよみがえらせ、神が親しく語りかけてくださり、神の住まいに永遠に住むことができる。そのような信仰です。ダビデのことは、主が三日目に墓の穴からよみがえられたことによって成就しました。このように、ダビデは苦しみの中で主の十字架の死とよみがえりを預言していたのだとわかります。

ダビデは荒野に捨てられていきます。主も荒野に立てられた十字架で捨てられました。すべてを失いました。でも信じ続けます。信じる者に主が必ず報いてくださると信じ続けます。主が信仰の模範となりました。たとえすべてを失っても、たとえいのちが尽きるときが来ても、信じることができる、信じてよいのだと、主は十字架の上から励まして下さいます。